The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	認識的モダリティにおける可能性判断について
Author(s)	三宅, 知宏
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1992, 26, p. 35-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

認識的モダリティにおける可能性判断について

三 宅 知 宏

1. はじめに

本稿は、日本語の認識的モダリティの体系的な記述のための基礎的な研究の一部となることを目的としたものである。具体的には、「カモシレナイ」という形式によって表される意味を考察の対象とする。そして、それは認識的モダリティの体系の中で、「可能性判断」という一つの下位類をなしていることを論証しようと試みる。

2. 認識的モダリティ

日本語のモダリティに関する研究に、近年、多くの研究者の関心が集められているが、モダリティに関する研究の中でも、特に多くの議論がなされているのが、命題の真偽に関する話し手の主観的な判断を表すモダリティについてのものである。一般に「真偽判断」とか「蓋然性判断」と呼ばれているものである。寺村（1984）の用語で言えば「概言」である。この種のモダリティを本稿では「認識的モダリティ」と呼ぶことにする。[1] 命題、モダリティ、さらにその下位類である認識的モダリティの本稿における定義は次のとおりである。

（1）「命題」：文において、客観的な事柄内容を表す意味成分

「モダリティ」：文において、話し手の発話時における主観的な心的態度を表す意味成分[2)]

「認識的モダリティ」：命題の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分

真偽判断に関するモダリティ（本稿の認識的モダリティ）についての議論が最も多くなされるということは、認識的モダリティがモダリティの中でも最も典型的なものであり、また研究対象として抽出しやすいといったことによるのであると思われる。

この種のモダリティに関する従来の研究における問題点を簡単に述べておく。

この種のモダリティに関する議論（具体的にはダロウ、ラシイ、ヨウダ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ等の形式の意味をめぐる議論）では「推量」という概念がしばしば用いられる。この推量という概念は、しかし、一般化されすぎたため、明確な定義のないまま極めて曖昧に用いられてしまうという難点がある。これは、それぞれの形式の表す意味を比較した記述・説明においてたちまち明らかになる。例えば「ダロウは純粋に主観的な推量なのに対してラシイは客観的な根拠に基づく推量」のように使われてしまうからである。推量という概念は明確化されねばならないと思われる。これは推量という概念により説明される形式を限定せねばならないということでもある。

次に、それぞれの形式が表す意味は、他の形式が表す意味とどのような違いがあるのか、といったことを明示的に記述するという課題が、まだ残されているといえる。これは日本語教育においても問題になることであろう。それぞれの形式について詳細な記述がなかったわけではない。しかしながら認識的モダリティというより大きな範疇の中で、他の形式と比較し

て、それぞれの形式が意味的にどのような性質を有しているか、といったことを体系的に考察したものはまだないと言ってよいであろう。意味の問題として、認識的モダリティを体系的にとらえるという観点が従来の研究において欠けていたと思われる。

筆者は以上のような問題点を顧み、モダリティの中に、認識的モダリティというカテゴリーを認めた上で、それを意味的にいくつかの下位類に分けて記述するという方法論を主張している。次に筆者の考える認識的モダリティの下位類を、それが表される形式を付記して、あげておく。

（2）

断　　定	無標
推　　量	ダロウ／マイ／活用語の推量・意向形〔ウ／ヨウ〕
実証的判断	ラシイ／ヨウダ／ミタイダ／ソウダ／トイウ
可能性判断	カモシレナイ
確信的判断	ハズダ／ニチガイナイ

紙幅の関係上、上で示した認識的モダリティの体系全体については、ここで詳細を述べる余裕はない。[3] 本稿は特にカモシレナイによって表される「可能性判断」について焦点をあてるものである。

3. 先 行 研 究

カモシレナイという形式に関する先行研究はあまり多いとは言えない。カモシレナイを中心的に扱った考察もみあたらない。阪田・倉持（1980）、寺村（1984）、野田（1984）、森山（1988、1989）、仁田（1981、1989 a）などが部分的に言及しているにすぎない。これらの考察において共通してみられることは、カモシレナイの意味を、ニチガイナイやダロウ（特にニチガイナイ）と比べて、相対的に蓋然性が低いことを表す、というふうに

考えていることである。次節で詳しく検討するが、相対的な蓋然性の低さということで説明しようとする、このような考え方に対して、本稿は批判的な立場をとる。

4. 可能性判断

「可能性判断」という、認識的モダリティの一つの下位類を次のように定義する。

（3）「可能性判断」：命題が真である可能性があると認識する。

単に、可能性があるということを認識しているにすぎないので、当然、命題の真偽は不確実なものであることが表される。この命題の真偽の不確実性（概言性）という点において、可能性判断は、推量や実証的判断や確信的判断と同じ性質を共有していることになる。

さて、注意すべきは、この可能性判断は可能性が高いとか低いとかという、可能性の程度（確からしさ）についての認識ではないという点である。人間の認識は相対的にはかれるようなものではないと思われる。命題の可能性に関する認識は、「ある場合に、真である」か、「いかなる場合においても、真である」か、のどちらかであると思われる。これは、「一つの可能性として真である」「総ての可能性として真である」と換言してもよい。

前者を表すのがこの可能性判断であり、後者は、典型的には断定の形で表される。本稿では詳しく述べることはできないが、推量、実証的判断、確信的判断についても、命題の可能性に関しては後者である。しかしそれらは、他の理由で命題の真偽が不確実なものになっている。例えば、推量は、命題が真であることを現実としてではなく、想像としてとらえているため、断定に比べて、不確実であることが表されると考える。

カモシレナイという形式によって表される意味は、この可能性判断であると考えるが、以下で、このことをカモシレナイの用例の観察を通して検討する。[4)]

繰り返しになるが、可能性判断は、命題が真である可能性がある、換言すると、ある場合に（一つの可能性として）命題が真である、との認識を表すものであった。これと対立するものは、いかなる場合にも（総ての可能性として）命題が真である、という認識であり、これは典型的には、断定として表されるものであった。次例はこの対比がよく分かる例である。

（4）「結局、このスパーリングで堀畑は何も学ばなかったわけじゃない。駄目だよそれでは」「そうかもしれない」「いやかもしれないじゃなくて、そうなんだ。」（一瞬）

（5）「つまりそのリカルドとマリアが、龍門さんの祖父母かもしれない、という話になったのよね」「そうだ。そして今は、かもしれないじゃなくて、実際に祖父母だったということが分かった」（斜影）

（6）ひょっとして人気歌手になれるかもしれないよ……いや絶対なれるぞ、ともこちゃんなら!!（元気）

また、一つの可能性として、真であればよいのであるから、同時に真であることができない命題を並べることもできる。次例を参照されたい。

（7）泊まるかもしれないし泊まらないかもしれない。どっちにしても相当おそくなる。（丘の）

（8）しかしスターリンとその一党がのさばるかぎり、いずれは滅びるときがくる。それは明日かもしれないし、五十年後かもしれん。（斜影）

（9）「どのくらい？」「決めていないんだ。意外と長くなるかもしれない。半年になるかもしれないし、一年になるかもしれない……」（一瞬）

上の例は断定（無標の形）では、述べることができない。矛盾する命題だからである。他の下位類（推量など）も、命題の可能性の認識という点については、断定と同じく、総ての可能性として、真であるということが表されるため、上の例をダロウやラシイ等の認識的モダリティを表す他の形式で置き換えることはできない。

（10）＊泊まるし、泊まらない
＊泊まるダロウし、泊まらないダロウ

同様のことが、次例でも分かる。

（11）一人の旅行は危ないと感じるかもしれない。割高と感じるかもしれないし、寂しく感じるかもしれない。（朝日）

上の例は矛盾する命題ではないので、カモシレナイを取り除いて、断定として述べることもできるが、そうした場合、〔危ないと感じる〕〔割高と感じる〕〔寂しく感じる〕の総てが真でなければならなくなる。可能性判断が表された場合は当然、その必要はない。

可能性判断は、命題の可能性に関する認識であったが、これは話し手の信念とは別物であると思われる。話し手の信念ではその命題は真（偽）であるが、実際は偽（真）である可能性もある、といった認識も可能だからである。次例を参照されたい。

（12）彼はもう家に着いたと思うが、あるいは、まだ着いていないカモシレナイ

(13)　それはうそカモシレナイが、私は本当だと思う

話し手の信念とは別物ということから、話し手にとって、それが真であることを信念の中に入れたくないような命題について、可能性判断はなされることがある。

(14)　もしかしたら肺病かもしれない。わたしはひそかに覚悟していた。　(道あ)

(15)　突然、ドーンと雷のような音がして、発電所から水蒸気が入道雲のように噴き上がるのが見えた。爆発事故かな、死ぬかもしれん、と思った。　(朝日)

次例は、未来の事態を予想的に述べる場合と反事実的な場合である。これらの場合は、他の形式との違いが必ずしも明示的ではないが、しかしながらやはり、前述した可能性判断としての性格があると思われる。

(16)　将来、世界がたんぱく源をクジラに頼る時代が、あるいは来るかもしれない。　(朝日)

(17)　米国は、新たな大店法の運用になお多くの注文をつけ、場合によっては早期に法の撤廃を迫るかもしれない。　(朝日)

(18)　有田のハプニングがなければ、すばらしい、思い出に残る週末だったかもしれない。　(人形)

(19)　これにもし数千数万の対空・対戦車ミサイルが規定通り火を噴いていたとすれば、湾岸戦争はさらに悲惨な結果を招いていたかもしれない。　(朝日)

カモシレナイという形式によって表される意味が、可能性判断という一つの類型をなすものであって、他の認識的モダリティの下位類とは質的に

異なっているということが、明示的に示せる文脈を、もう一つあげる。それは、話し手の意志的な動作を表す場合である。次例をみられたい。

(20)　「君は明日、学校に来る？」「いや、休むカモシレナイ」

(21)　#いや、休むダロウ／ニチガイナイ／ハズダ／ラシイ

（#はその文脈では不適切な発話であることを示す）

上のように、カモシレナイは、話し手の未来における意志的な動作についての認識を表すことができる。

このような文脈においては、ダロウなど、認識的モダリティが表される他の形式のどれも、生起することができない。非文法的ではないが、この文脈では不適切なものとみなされるからである。このような話し手の意志的な動作を表す文脈においては、話し手は当然、断定することができるとみなされ、有標的に命題の真偽が不確実であることが表される形式が生起すると情報価値が低くなってしまうためであると思われる。

それではなぜ、カモシレナイであれば生起できるのか、ということが問題になるが、これは、たとえ命題の真偽が不確実であっても、可能性を述べるということは情報価値があるとみなせるからであると思われる。前述したように、可能性判断は、話し手の信念とは異質のものであり、可能性の認識という点では、断定と対立的な関係にあるものであったからである。可能性の認識という点では、認識的モダリティにおける可能性判断以外の下位類は、断定と同じであった。ここにおいても、可能性判断を一つの類型とすることの妥当性がみとめられるであろう。

次例はこのような文脈の例である。ダロウなど、カモシレナイ以外の形式で置き換えることはできない。

(22)　昨夜トレドで食事をしたとき、龍門はギジェルモの消息を尋ね

て、ロンドンへ行くかもしれないと言った。　（斜影）

（龍門が「言う」の動作主）

また次例は、意志的な動作を表しているわけではないが、やはり話し手が断定できるとみなされる文脈であるため、カモシレナイ以外の形式は生起できないと言える。

(23)　その夜、近くの派出所から、電話がかかり、場所と自転車の色など詳しく聞かれました。そして「自転車を乗せる車がないので、今すぐには取りに行けないかもしれません」と、いわれました。　（朝日）

以上、カモシレナイによって表される意味として可能性判断という類型を設定し、その妥当性を検討してきた。そして認識的モダリティの他の下位類と異なっていることが明示的に示される文脈として、互いに矛盾する複数の命題が共起している場合と話し手の意志的な動作が表される場合とをあげた。どちらの文脈も、可能性判断しか生起することができなかった。

従来の研究にみられるように、仮にカモシレナイの表す意味として、他の形式に比べて相対的に蓋然性が低いというようなものを設定したとすれば、これらの現象の説明は困難であろう。それに対し、本稿の記述に従えば、明示的な説明が可能であると思われる。この点において、本稿がカモシレナイに対して、従来の研究のような、他の形式と比べた相対的な意味記述をしなかったことは有効性があると思われる。[5)]

5.　可能性判断が表される迂言的形式

可能性判断が表される形式として、カモシレナイがあることを述べてきたが、助動詞相当の形式に限らないならば、他の形式でも表されることがある。このような助動詞相当でない形式は迂言的な形式と呼び、助動詞相

当のものと、レベルの違いをみとめておく。

ここでは、用例の指摘にとどめ、詳細は稿を改めて考察する。

まず、節相当のレベルのものとして、「～可能性がある」、「～恐れがある」などがある。

(24) 大阪管区気象台の一ヶ月予報によると「一月下旬に冬型の気圧配置が強まり、寒気が南下して日本海側で大雪の降る可能性がある」といい、スキー場関係者の顔が、少し、ほころびそうだが。 (朝日)

(25) 金利低下は先週末からの円安を加速させ、物価を押し上げる恐れがある (朝日)

(26) 市は非公開とした理由について、今後の行政への支障のほか①会合に使った店の個人情報を明らかにすることで、店に不利益、を及ぼす恐れがある②会合の相手の利益をそこなう可能性がある――など、市議会決算特別委員会で支出関係文書の公開を拒んだのと同じ理由を挙げた。 (朝日)

これらの形式は、ほぼカモシレナイと等価な意味を表していると思われる。ただし「恐れがある」は、その命題が真であることが望ましくないことであるというニュアンスが加わるので、そのようなニュアンスを除いて考えなければならないけれども。

また、語以下のレベルのものとして、「～シカネナイ」がある。

(27) 美しい人気女優の喫煙場面は若者たちに悪い影響を与えかねません。 (朝日)

(28) イラクのイスラエルに対するミサイル攻撃は、イスラエルによる報復攻撃という最悪の事態をもたらす可能性をとどめている。容易ならぬ事態となりかねない。 (朝日)

「～シカネナイ」は複合動詞の後項ということから（したがって、語以下のレベル）、命題にテンスの分化を許さないという制約があり、また、「恐れがある」と同じく、望ましくないといったニュアンスが加わる。

ここで簡単に指摘した、迂言的な形式については、従来のモダリティに関する研究においても、殆ど顧みられていないと言ってもよく、モダリティ論の中でどのような位置付けが与えられるか、これからの課題として残されていると思われる。

6. おわりに

本稿では、カモシレナイによって表される意味として、可能性判断という類型を設定して一般化した。そしてそれが認識的モダリティにおいて、一つの下位類として位置付けられるべき根拠があることを述べた。

方法論として、個々の形式の意味を個別に記述していくのではなく、認識的モダリティの体系を視野に入れつつ、各形式によって表される意味を分析・記述していくという本稿のような姿勢は、有効で、かつ重要なものであると考える。本稿で試みたような作業の積み重ねが、やがて日本語の認識的モダリティの体系を明らかにしていくものと思われる。

注

1) 本稿で認める認識的モダリティは、後述するように、広く命題の真偽に関する話し手の認識を表すものであるから、当然、「断定」（寺村（1984）の用語で言えば、「確言」）も含まれることになる。その点で広義である。
2) 本稿が考えるモダリティは、この定義からも分かるように意味論的な概念であり、統語的（構文論的）な概念ではない。先行研究をふまえた、詳細なモダリティの定義については、三宅（1992）を参照されたい。
3) 先にも述べたように、ここで述べている認識的モダリティは意味的な概念であるから、この表の分類も、あくまで意味的な観点に基づいている。統語的（構文論的）な観点に立てば、明らかに、ダロウなど「推量」が表される形式は、他の類型が表される形式とは異なったレベルにあると言える。

また、この分類に従えば、推量が表される形式は極めて限定されたものになっているが、ここで推量が表されるとした形式は総て、いわゆる「確認要求」としての用法も持つものである。ここにおいて推量から確認要求への派生的関係が捕えられることになる。

尚、可能性判断以外の下位類についての詳細な考察は、三宅（1992）を参照されたい。

4）これからの考察の前提として、カモシレナイがそれで一つの語（助動詞）としての性格を有する形式であるということを認めておく。

5）用例を観察していくと、カモシレナイは、「ひょっとしたら／すると」「もしかしたら／すれば／すると」などの副詞と共起することが非常に多い。これらの副詞の表す意味が「ある場合において」または「一つの可能性において」というようなものであることが論証できたならば、本稿の議論の補強になると思われるが、まだこれらの副詞の性格がよく分からないので、事実の指摘にとどめる。

参考文献

阪田雪子・倉持保男（1980）『文法Ⅱ　助動詞を中心にして』国際交流基金

寺村秀夫（1979）「ムードの形式と意味（1）── 概言的報道の表現 ── 」『文藝言語研究　言語篇』4

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

中右　実（1979）「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版

中右　実（1984-86）「意味論の原理（1）～(24)」『英語青年』130-1～131-12

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院

仁田義雄（1981）「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『国語と国文学』58-5

仁田義雄（1989ａ）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版

仁田義雄（1989ｂ）「述べ立てのモダリティと人称現象」『阪大日本語研究』1

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

野田尚史（1984）「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」『日本語学』3-10

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版

三宅知宏（1992）「日本語の認識的モダリティの研究」大阪大学修士論文

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版
渡辺　実（1971）『国語構文論』塙書房
Leech, G. N. (1987) *Meaning and the English Verb* (Second edition), Longman
Lyons, J. (1977) *Semantics Volume 2*, Cambridge U. P.
Nakau, M. (1976) "Tense, Aspect, and Modality" in Shibatani, M. (ed.) *Syntax and Semantics Vol. 5 : Japanese Generative Grammar*, Academic Press
Palmer, F. (1979) *Modality and English Modals*, Longman
Palmer, F. (1986) *Mood and Modality*, Cambridge U. P.

付記

本稿を執筆するにあたり、仁田義雄先生より多くの有益な御教示を賜った。記して感謝申し上げる。言うまでもなく、本稿における不備、誤りは総て筆者の責任に帰するものである。

（大学院後期課程学生）